

# 教育新聞

発行所 教育新聞社  
 〒110-0005  
 東京都台東区上野3-17-7  
 代表 ☎ 03 (3832) 3 5 7 1  
 FAX 03 (3832) 3 5 7 0  
 URL <http://www.kyobun.co.jp>  
 E-mail [kyoiku@kyobun.co.jp](mailto:kyoiku@kyobun.co.jp)  
 購読料 2625円(月額、税込)  
 振替口座 00170-6-4369  
 ©教育新聞社 2009  
 週2回 月・木発行

本を読む、美術館へ行くなど

## 保護者の普段の行動

# 子どもものの学力に強い関係

国語、算数の成績上位層の児童の保護者のほうが「美術館や美術の展覧会へ行く」「本(雑誌や漫画を除く)を読む」などを「よくする」傾向にあり、同じく成績下位層の児童の保護者のほうが、「テレビのワイドショーやバラエティ番組を見る」「スポーツ新聞や女性週刊誌を読む」などを「よくする」傾向にあるなど、保護者の普段の行動が子ども(小学校5年生)の学力との間に強い関係があることがこのほど、お茶の水女子大学とBenesse教育研究開発センターが共同で実施した「教育格差の発生・解消メカニズムの調査研究」で明らかにされた。

お茶の水女子大学とBenesse教育研究開発センターが共同で

## 鉄筆

小・中学校の新しい学習指導要領の「移行措置」がスタートを切った。先行実施される理科教育の扱いに注目

が集まっているもの、学校現場からは、まだ、理科教育に積極的に取り組もうとする熱意は感じられない▼それも無理のないことで、教員養成系学部卒の小学校教員(25歳以下)の約76%が文系といわれている。「科学や理科に関心を持ってほしい」と言っても無理な話である。また、現場では長い間、受験対策用の理科教育が幅をきかせてきたせいか、「楽しい理科」がなかなか行われにくい状況があるのも事実

▼「起死回生の起爆剤はないのか」と思いきや、理科が好きになる素材は目の前にあるという。九州大学大学院芸術工学研究院の砂田向啓特任教授が「教育時評(財)学校教育研究所発行、17号)の理科教育の特集号で、「時代にマッチした教育環境の充実」と題して提言している▼砂田先生は「理科の実習や実験の嫌いな子どもはいない。将来の産業の種、可能性の主役は子どもだ。子どもたちの興味の目線と同じくする取り組みが不可欠だ」としたあと「日本が誇る世界最高のデジタルインフラ環境を最大限に生かす必要がある」「国を挙げて取り組む地上デジタル放送。インタラクティブ効果が証明されるころ、子どもほとんどもない可能性を引き出す宝庫となるだろう」と予言している▼このことで子どもたちの感動を呼び起こせば、理科好きな子どもはもっと増えるにちがいない。行政もそう仕向けたらどうか。